

年中児における〈はずみ動作〉獲得に関する一考察 — 東北文教大学附属幼稚園課外運動教室のとりくみ —

石井 裕明・阿部 弘生*・渡邊 榮子**・
山崎 裕美**・加藤 ゆき**・五十嵐 悠維**・
大場 美咲**

体力・運動能力の低下や運動への二極化傾向は、現代の子どもの動きに影響を及ぼしており、それに対する様々な手立てが講じられている。こうした社会的な動きの中、我々養成校に求められていることは、教育者・保育者を目指す学生を育てつつ、実際に子どもと向き合っている現場（学校や園）と連携し、実践と検証を積み重ねることである。本稿では、東北文教大学附属幼稚園課外運動教室において、様々な運動課題の実践による〈はずみ動作〉獲得過程について考察を行った。その結果、回数を重ねるたびに走り方をはじめ、ぎこちない動きに改善がみられ、リズムカルに〈はずみ動作〉を繰り返す子どもが増えた。また、〈はずみ動作〉獲得には身体各部位を随意に働かせ、様々なリズムに自分の動きを合わせるための課題を設定することが重要であり、神経系が発達する幼児期においては、上半身と下半身、左半身と右半身の連携を促す動きをとりいれる必要性が示唆された。

I. 研究目的

(1) 大学と幼稚園の連携

昔は家庭で経験をしていた動きの中にも、今は幼稚園で育ててあげなければならぬ動きがあるように思います。

これは、東北文教大学附属幼稚園（以下、附属幼稚園という）の教員からの言葉である。

子どもの体力・運動能力の低下や、運動への二極化が叫ばれて久しい¹。それにも関わらず、社会環境の急速な変化は留まることを知らず、三間（仲間・時間・空間）の減少をはじめ、子どもたちが十分に体を動かす機会への手立てはまだまだ多くの課

* 東北文教大学短期大学部非常勤講師

** 東北文教大学附属幼稚園

題を有している。さらに、子ども時代に十分に体を動かすことのなかった人々が親の世代となり、保護者自身の経験の少なさも現代の子どもたちに大きな影響を及ぼしている。こうした時代において、子どもに十分な運動の機会を与え、経験させる上で、幼稚園・保育園の持つ役割は大きく、今後さらに重要なものとなってくるといえよう。

冒頭の言葉に代表されるように、幼稚園教員たちは子どもたちの運動面に対して、動作がぎこちない、転ぶことが多い、手をつけず顔面から転んでしまう、姿勢保持が困難、鉄棒で自分の体を支えられない等の課題を感じている。そして、そうした身体的な課題は集中力や気分の浮き沈み、挑戦する心にも影響を及ぼしているという声も聞こえる。教員たちは幼稚園における各種の活動や行事を通して改善を目指しているものの、園における活動の時間や業務時間には制約があり、それに加えて単なる経験不足なのか、身体的な異常なのかがわからず、解決に向けた手立てに自信を持ってないということも事実である。

子どもたちに対するこのような問題意識は全国的にもみられ、いくつかの大学、短期大学部において、幼稚園や保育園の子どもたちに対して直接的に働きかける動きが出てきている²。すなわち、未来を担う子どもたちの育成に大学と幼稚園の連携が必要な時期にきているといえよう。

さて、東北文教大学では附属幼稚園と短期大学部が連携をとり、年中児を対象とした運動教室（以下、課外運動教室という）が開講されている。課外運動教室の責務は、園児の動作経験の豊かさを補充し、さらに運動による楽しさや達成感を味わうことで生涯につながる運動習慣の基盤形成に寄与することである。これをより実りあるものにするためにも、附属幼稚園教員と課外運動教室の指導員が連携し、活動における問題点の抽出とそれを活かした実践・検証は常に行われていなければならない。これが本研究に向かう上での動機の始点である。

（2）子どもたちの運動課題－〈はずみ動作〉－

ヒトが獲得する基本的な動きについては、体力科学センターが平衡系、移動系、操作系としてまとめており³、平成24年3月に文部科学省より告示された「幼児期運動指針」（以下、「運動指針」という）⁴ならびに同指針策定委員会によって作成された『幼児期運動指針ガイドブック～毎日、楽しく体を動かすために～』（以下、『運動指針ガイドブック』という）⁵では、3歳から4歳ごろ、4歳から5歳ごろ、5歳から6歳ごろと各年代における運動能力の獲得について具体的に記されている。

ここで筆者らが、これまでの運動教室や附属幼稚園の諸々の行事や園内活動における子どもたちの動きを観察したところ、リズムをとる際に膝の曲げ伸ばしが上手にできない、縄跳びでジャンプするタイミングがつかめない、リズムカルにジャンプすることができない、力の入り具合や腕の振りがぎこちない、バランスをとることやリズムをとることができない、上半身と下半身を協調させた動きが苦手、といった課題がみてとれた。これは4～5歳ごろに著しく発達するといわれる協応性や敏捷性、平衡性、巧緻性などの調整力が十分に養われていないことを意味している⁶。佐々木玲子は、神経系の発達との関係を踏まえた上で、3～4歳ごろの幼児では、片足での跳躍や左右の動的なバランスの未熟さ、左右脚の切り替えを規則的に行うことや片側支配と両側支配の切り替えの難しさを踏まえつつも、「この時期にこういった動きをたくさん経験することには意味があり、神経系の発達に支えられ動作は習熟していく可能

性がある」⁷と述べ、〈はずみ運動〉について論じている。従って、神経系の発達を考慮した動作の経験の豊かさが重要であり、リズムやバランス、協応力を必要とする動作を獲得する手立てが必要であると考えられる。

以上から、本研究では課外運動教室における子どものはずむ動き（以下、〈はずみ動作〉という）に着目し、様々な運動課題の実践による〈はずみ動作〉獲得過程について考察を行う。

II. 〈はずみ動作〉について

〈はずみ動作〉は全力ではなく調節的に力を発揮することによって可能となる、リズムカルに跳ぶことにつながる動きである。それぞれの運動様式の特徴に合わせた姿勢の保持やバランス、下肢の筋力、パワーなど、必要とされる運動系の身体発達レベルと、腕の振りや膝の曲げ伸ばし等のように四肢や全身を協調的に用いることすなわち神経系の発達が大きく関与するとされ、さらに認知的な発達も関わりながら、動きを経験することによって習熟していくものとされている⁸。さらに、神経系の急激な発達に支えられ、知覚を手がかりとして運動を自分の思うように巧みに制御（コントロール）する働きを運動コントロール能力と呼ぶ場合もある⁹。パフォーマンスも身体の大きさや筋力などの機能発達に必ずしも準じることなく、リズムを中心に動きの選択を工夫することによって年少児から楽しむことができるものとなるとされ、3歳ごろにはできるようになるとされている。それが加齢にともない、その場での両足跳び、片足跳び（ホップ、ケンケン）、ギャロップ、スキップと動作のバリエーションは増加していく。そして、体のバランスがとれてくる4歳ごろには、リズムカルに運動することができるようになり、リズム感（強弱・速度・拍子・リズムパターン）の基礎が身に付き¹⁰、6歳ごろにはほぼ完成するといわれている¹¹。その他に、リズムカルな動作の発達には性差が指摘されることも多く、女兒が男児に比べて1～2歳程度進んでいるという報告もなされている¹²。このように、動作の出現にはおおよその順序や性差がみられるが、動作獲得における年齢幅も広く、杉原らが乳幼児期から児童期にかけて「運動することによって運動コントロール能力を最も容易に高めることができる発達の敏感期である」¹³と捉えているように、トレーナビリティーが大きいとされ、経験の豊かさが必要と考えられている。従って、筋力や心肺機能（循環機能）の発達と関係が深い全身運動よりも、腕の振りと脚の協応力との関係が深い跳躍運動の幼児期における指導は、下地のできている感覚・神経系の機能を中心とした協応性や敏捷性、平衡性、巧緻性などの調整力を育てることが必要であるといえよう¹⁴。

III. 東北文教大学附属幼稚園課外運動教室について

附属幼稚園では、〈丈夫な体で力いっぱい遊ぶこども〉、〈きまりを守って友達となかよくするこども〉、〈よく見よく考え工夫するこども〉、〈すばらしいものや善いものを喜ぶこども〉、〈よいことは自分から進んでするこども〉といった子ども像

を持ち、教育目標を以下のように掲げている。

東北文教大学附属幼稚園の教育目標

幼児期は、人間生涯の基礎を形成する時期です。幼児に、健康な体と豊かな心を培う教育環境を保証してやることが大人の努めです。

ことに幼児は、多様な個性を持ち、無限の能力を秘めています。その一人ひとりの可能性を伸ばし育てることが幼児教育者の使命だと考えます。

自立と自律、自己確立と社会性、求知心と情操など、全面的に発達するように、一日一日の園生活を大切に組み立てています。

そして園児が喜びと希望を持って登園できるような、よりよい人的・物的環境を整備するように懸命に努力しています。

(東北文教大学附属幼稚園パンフレットより)

また、〈夢いっぱい幼稚園～豊かな環境の中で子どもたちの夢が芽ばえ確かな力が育ちます～〉と銘打ち、幼稚園での活動について、〈夢は丈夫な体づくりから〉、〈友だちと夢をはぐくむ〉、〈一人ひとりの夢をともに育てる教師〉、〈夢は集中して取り組める場の提供から〉の4点を柱として子どもの育ちを促す指針を挙げている。また、〈心が動く保育で意欲溢れる子どもに育てます〉と謳い、自然体験活動や行事、充実した遊びの展開を紹介している。この幼稚園のとりくみの一つに、子どもの希望や適性に応じてそのよい芽が伸ばされるようにと、東北文教大学短期大学部の教員や各専門の指導者による課外教室が昭和46年から行われている。その中で運動教室もとりいれられるようになり現在に至っている。

課外運動教室は、年中組（4～5歳）を対象に、毎年5月から2月まで東北文教大学体育館において年20～25回程度行われている。平成26年度の受講園児は45名、指導員は筆者ら（石井、阿部）の他に向田陽子氏の3名と、年中組担当教員（加藤、五十嵐、大場）3名のうち各回2名が補助として担当し、指導計画に関しては、園での行事（運動会等）や園児の個々の運動能力を把握しつつ、状況に応じて年中組担当教員の助言を得ながら指導員が編成している。

また、指導者側としては、『幼稚園教育要領解説』（以下、『教育要領解説』という）に、「運動的な遊びか否かを問わず、幼児の興味の広がりによって展開する様々な活動を通して、十分に全身を動かし、活動意欲を満足させる体験を積み重ねることが、身体の調和的な発達を促す上で重要な意味をもつものであることに留意しなければならない」¹⁵とあり、『運動指針ガイドブック』には、「幼児期の運動は、体に過剰な負担が生じることのない発達の特性におうじた遊びを中心に展開することで、無理なく多様な動きを身に付けることができます」¹⁶とある。さらに、鈴木康弘が指摘するように、運動量の確保のために効率性を重視するあまり、幼児の自己決定感を奪い、先生が決めたことをやらされているというネガティブな感覚を与えてしまう危険性を考慮する必要がある¹⁷。これらのことから、遊び=楽しさを通じた体づくりに留意し、運動教室を行った。具体的には、場の設定や動きを遊びとしてとりいれることに配慮して、東北文教大学体育館に備えられているカラーコーンやマット、平均台や跳び箱、設置されている肋木やフロア上に引かれたライン等を利用し、それらに見立ての要

素をとりいれつつ、基本的な運動が楽しみを得ながら獲得できるように努めた。

IV. 研究方法

(1) 実施内容

本研究の対象とした3回の運動教室においては、それぞれに遊びとしての課題を設け、教員が先頭に立ち、課題をクリアしていくように促す方法をとった。具体的な場の設定として、「運動指針」にも挙げられた縄跳びを飛び越すことの他に、トランポリン、エヴァーマットのよう跳ぶ動きを促進する遊具に子どもたちの嗜好性があり、自身の力発揮と受動的な力とのタイミングの調節、空中に跳びあがった時の空間感覚やバランスなど、新たな身体調整感覚を獲得することができるという指摘があることから¹⁸、①フープの中にジャンプしてとび込む（両足跳び、片足跳び、ケンケンパ）、②小トランポリンで数回跳ねてからジャンプ、③ロイター板を利用して遠くにジャンプ、④大トランポリンでの遊び、を選択した。これを取り入れた日付を以下の表1に示す。

表1 実施した運動課題

	10月3日	10月17日	10月31日
①	両足跳び 片足跳び ケンケンパ	両足跳び 片足跳び ケンケンパ	
②	小トランポリン		小トランポリン
③		ロイター板を利用してとび込む	
④			大トランポリン

また、上半身と下半身を協調させる運動として、①頭の上で手をたたきながら走る、②胸の前で手をたたきながら走る、③四つ足で移動する、などを準備運動や移動の時間を利用してとりいれた。

(2) 日時、場所、分析方法

本研究は、平成26年10月3日、10月17日、10月31日の3回の運動教室において、VTRカメラによる撮影を行い、子どもたちの〈はずみ動作〉と上半身と下半身の協調作用に関わる動きを観察した。指導時間・場所はいずれも14時20分から15時20分の60分間、東北文教大学体育館で行った。VTRカメラは子どもたちの目に触れないよう、体育館ギャラリーの体育館全体が見渡せる位置に一台設置した。映像の分析は筆者ら計7名で行った。なお、本研究においては、個々の事象について数値化することはせず、現場の教員による観察の視点を重視した上で、指導過程における子どもたちの動きの問題点や動作の獲得過程について、全体的な傾向として把握することに努め

たことを付言しておく。

V. <はずみ動作>獲得に向けた運動課題と子どもたちの動き

(1) 上半身と下半身を協調的に用いた動き

○四つ足で歩く

四つ足歩きは、上肢や体幹の力はもちろんのこと、重心位置を的確に捉えながら、上半身と下半身を協調させ、巧みに使うことが求められる動きである。この動きは、はずみ動作をはじめ神経系の発達の観点から様々な運動の獲得に関わる動きと考えとりいれた。

観察の結果、指導員が見本をみせ、「お尻を高くあげること」、「膝をつかないこと」を言葉がけしているにも関わらず、ハイハイの動きをしてしまう子どもが多くみられた。ハイハイは両手、両足、両膝による6か所で体を支えることができるが、四つ足歩きは、両手両足の4か所だけで体を支えなければならない。本研究では、ハイハイの動きをとりいれることなく、四つ足歩きから実践した。しかしながら、子どもたちの発達段階や動作の獲得段階を考えたとき、ハイハイの動きもまた重要である。上記のような子どもたちの実態を考えると、ハイハイを含め、四つ足歩き獲得までの過程についても再度検討する必要性が示唆された。

○両手を打ちながら走る

①胸の前で両手を打ちながら走る動きと、②頭の上で両手を打ちながら走る動きをとりいれた。両者とも手を打つと足が止まる、反対に走ろうとすると手が止まってしまう子どもが散見された。①においては手が視界に入ることによって操作しやすいにも関わらず、手と足を巧く協調させることのできない子どもが多くみられた。反対に②は手と足を協調させることのできる子どもが多かった。これは①に比べて②の方が足の動きが抑制されやすく、手の動きに足の動きが同調されやすいことが一つの要因として考えられる。

(2) <はずみ動作> 両足跳び、片足跳び、ロイター板、トランポリン

○片足跳び・両足跳び・ケンケンパ

同一脚による連続した片足跳びは、全体的にリズムカルな運動ができていた。しかし一方で、左右の足の切り替え動作になると苦手とする子どもが多くみられ、運動課題として浮かび上がった。両足跳びでは連続したリズムカルな運動にならず一つ一つの動きで区切られる傾向があった。また、左右の足の着地に時間差のある子どもが散見された。また、片足跳びでは、1歩～2歩が精一杯の子どもやフープを跳び越えても転んでしまう子ども、その場で立っていられず跳ねてしまう子どもがいた。これは筋力の発達が十分でないことはもちろんであるが、日ごろよく動いている子どもほどバランスもとれていることから、動作経験が大きく影響しているといえる。

○ロイター板－水平方向への跳躍－

片足よりも両足で跳んでいる子どもの方が力を巧く利用し、遠くに跳ぶことができていた。片足で跳ぼうとする子どもは、ロイター板の力を巧く受け止めることができず、前に倒れこんでしまう傾向があった。

水平方向に跳ぶ動きは、走る動きからロイター板を踏み、その踏切から上昇する力をもって跳ぶという動きであり、走るから踏む、踏むからロイター板の力を受け止めるといったそれぞれのタイミングのとり方に難しさがある。しかし、一つの動きから別の動きへの切り替えは、遊びはもちろんのこと、日常生活の様々な場面で利用される。したがって、鬼ごっこを含め今後とりいれるべき動きであろうことが示唆された。

○トランポリン—垂直方向への跳躍—

両足跳びを経験させた子どもの方が、トランポリンの力を巧く利用することができていた。併せて左右の足の着地に時間差のみられる子どもは、トランポリンの力を巧く利用することができない傾向があり、左半身と右半身を協調させる動きを今後とりいれる必要性が示唆された。ただし、トランポリンにおいては、接地時のバランス能力と空中でのバランス能力の二つが必要となり、それを踏まえた上での検討が今後必要になると考えられる。



(写真1)



(写真2)

写真1、2は大型トランポリンにおける幼児の跳躍動作を示したものである。1ではトランポリンの反力を巧く使い、高い跳躍ができています。2では、接地または離地において左右の時間差が大きいことから、反力を得ることができていない。



(写真3)



(写真4)

写真3、4は小型トランポリンにおける幼児の跳躍動作を示したものである。大型トランポリンと同様に接地または離地における時間差が、跳躍の巧さに影響を与えていた。

以上のように、上半身と下半身を協調的に用いた動き、両足跳びと片足跳び、ロイター板やトランポリンを利用した水平方向と垂直方向への跳ぶ動きをとりいれてきたが、回数を重ねるたびに走り方や体の動きのぎこちなさに改善がみられ、リズムカルに〈はずみ動作〉を繰り返す子どもが増えてきた。また、〈はずみ動作〉獲得には身体各部位を随意に働かせ、ロイター板やトランポリンの上昇する力を受けるように、様々なリズムに体の動きを合わせるための課題を設定することが重要であり、神経系が著しく発達する幼児期だからこそ、上半身と下半身、左半身と右半身の連携を促す動きをとりいれる必要性が示唆された。

VI. おわりに

本研究における活動を通して、以下のような結果がみられた。

- (1) 両足跳びと片足跳びを比べた時、片足跳びは両足跳びよりもリズムカルに跳ぶことができていた。
- (2) 両足跳びを経験している子どもはトランポリンの力を巧く利用することができていた。これは、ロイター板での水平方向への跳躍においても同様であった。
- (3) はずみ動作につなげるためには両足跳びが重要であり、上半身と下半身はもとより、左半身と右半身を協調させた動きの獲得が必要であることが示唆された。

本研究を通して、子どもの動きの獲得には経験が非常に重要であることを再確認できた。ただし、片足跳びや両足跳びがリズムカルに行えたとしても、その場で繰り返すことができずに前進してしまう子どもが多くみられ、トランポリンを利用した垂直方向への跳躍にも影響を及ぼしていた。準備運動の中でとりいれているつま先歩きを苦手とする子どもも多いことから、より細部にわたった身体各部位への気付きを提供する動きをとりいれることが〈はずみ動作〉の獲得につながるとも考えられる。この辺りのことを今後の課題としたい。

さて、ここまで子どもの姿を観察することで論を進めてきたが、養成校としての立場から現在の学生たちの授業での様子を見てみると、子どもたちと同様の運動課題が散見される。近い将来子どもたちの前に立つ保育者として、今ある自分の課題とそれを克服する方法や気持ちを育てることもまた、未来を担う子どもたちの育成において重要である。今後、保育者の養成と子どもたちの育成を両輪として様々な活動にとりくまなければならないといえる。そのためにも養成校と幼稚園の連携をさらに強める必要があるだろう。

本研究にあたり、向田陽子氏には多くの助言を頂いた。心より御礼申し上げる。また課外運動教室の補助を快く引き受けてくださった学生達にも感謝申し上げます。

【脚注】

- ¹ 例えば、平成24年3月30日に文部科学省によって告示された「スポーツ基本計画」では、「近年、積極的にスポーツをする子どもとそうでない子どもの二極化が顕著に認められることから、運動習慣が身に付いていない子どもに対する支援の充実などは引き続き大きな課題としてある」と明言されている。(文部科学省「スポーツ基本計画」2012, p.7.)
- ² 例えば、『子どもと発育発達』第5巻第3号において、北海道教育大学、琉球大学、国際武道大学、岐阜聖徳学園大学、国士舘大学のとりくみが紹介されており、各大学が地域、保護者と連携をとりつつ行った、データの収集・分析を含めた実に様々なとりくみが紹介されている。(『子どもと発育発達』第5巻第3号, pp.130-153, 2007, 参照.)

3 体力科学センターは以下のようにヒトの基本的な動きをまとめている。

カテゴリー	動作の内容	個々の動作
Stability (平衡系)	姿勢変化	たつ・たちあがる、さかだちする、わたる
	平衡動作	かがむ・しゃがむ、まわる、ころがる、ぶらさがる、おきる・おきあがる、ねる・ねころがる、のる、うく、のりまわす、あるきわたる、つみかさなる・くむ
Locomotion (移動系)	上下動作	のぼる、とびあがる、とびつく、とびおる、すりこむ、はいのぼる・よじのぼる、あがる・とびのる、おる、とびこす
	水平動作	はう、およぐ、はしる・かける・かけっこする、おう・おいかける、ふむ、あるく、とぶ、すべる、ギャロップする、ツーステップする・ワルツする、スキップ・ホップする
	回転動作	かわす、もぐる、かくれる、にげる・にげまわる、はいる・はいりこむ、くぐる・くぐりこむ、とまる
Manipulation (操作系)	荷重動作	かつぐ、うごかす、つきおとす、ささえる、こぐ、なげおとす、はこぶ・はこびいれる、おこす・ひっぱりおこす、おぶう・おぶさる、もつ・もちあげる・もちかかえる、おす・おしだす、あげる、おさえる・おさえつける
	脱荷重動作	おろす・かかえておろす、おる、もたれかかる、うかべる、もたれる
	捕捉動作	つかむ・つかまえる、うけとる、まわす、とめる、うけとめる、つむ・つみあげる、あてる・なげあてる・ぶつける、わたす、ころがす、いれる・なげいれる、ふる・ふりまわす
	攻撃的動作	たたく、くずす、ひく・ひっぱる、つく、ける・けりとばす、ふりおとす、うつ・うちあげる・うちとばす、たおす・おしたおす、すもうをとる、わる、しばる・しばりつける、なげる・なげあげる、あたる・ぶつかる

（体育科学センター調整力専門委員会体育カリキュラム作成小委員会「幼稚園における体育カリキュラム作成に関する研究（Ⅰ）－カリキュラムの基本的な考え方と予備調査の結果について－」：『体育科学』第8号，pp.150-155, 1980, 参照.）

4 文部科学省「幼児期運動指針」2012.

5 例えば、本研究で扱う年中児（4歳から5歳ころ）では、全身のバランスをとる能力の発達と用具を巧みに操作する動き（持つ、運ぶ、投げる、捕る、転がす、蹴る、積む、こぐ、掘る、押す、引く）の発達、体全体でリズムをとる動き（なわ跳び）の発達がみられるとされている。そしてこれらの遊びを通して、自分たちでルールや決まりを作ることにもしろさを見出し、さらに自分の近くにいる友達や大人が行う魅力ある動き（遊び）や気に入った動きの真似（模倣）をすることに興味を示し、それらを楽しみながら繰り返すことによって自然に動きを獲得するようになるとされている。（文部科学省幼児期運動指針策定委員会『幼児期運動指針ガイドブック～毎日、楽しく体を動かすために』 pp.14-15, 2012, 参照.）

6 日本幼児体育学会編『幼児体育－理論と実践【初級】－』，大学教育出版，p.26, 2013, 参照.

7 佐々木玲子「跳ぶ～リズムカルに」：『子どもと発育発達』第11巻第3号，p.181, 2013.

8 例えば、『幼児体育－理論と実践【初級】－』において、跳躍距離に関しては、跳躍距離の長短は腕の振りと脚の伸展の協応力との関係の深さを指摘している。そのため、脚の筋力の発達と協応動作の発達により、6歳児になると3歳児の2倍近くの距離を跳べるようになるという。（前掲書6，p.28.）

9 この運動コントロール能力は、「空間的コントロール」「時間的コントロール」「力量的コントロール」と分類され、跳ぶというパターンを例にとれば、方向を変えて跳ぶのは空間的、速さやリズムを変えて跳ぶのは時間的、距離や高さを変えて跳

- ぶのは力量的コントロールとなる。(杉原隆・河邊貴子編著『幼児期における運動発達と運動遊びの指導－遊びのなかで子どもは育つ－』ミネルヴァ書房, pp.18-25, 2014, 参照.)
- ¹⁰ 石井美晴・菊池秀範編『＜新訂＞保育の中の運動あそび』萌文書林, p.26.1994, 2014 (新訂版第4刷) .
- ¹¹ 前掲書7, p.182.
- ¹² 前掲書7, p.180.
- ¹³ 前掲書9, p.9, 2014.
- ¹⁴ 前掲書6, p.26.
- ¹⁵ 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館, p.72, 2008, 2013 (8刷) .
- ¹⁶ 前掲書5, p.11.
- ¹⁷ 鈴木康弘「遊びとしての運動指導と子どもの自己決定」:『子どもと発育発達』第10巻第4号, 2013.
- ¹⁸ 前掲書6, pp.181-182.

【参考文献】

- 1) 石井美晴・菊池秀範編『＜新訂＞保育の中の運動あそび』萌文書林, 1994, 2014 (新訂版第4刷) .
- 2) 佐々木玲子「跳ぶ～リズムカルに」:『子どもと発育発達』第11巻第3号, pp.180-182, 2013.
- 3) 鈴木康弘「遊びとしての運動指導と子どもの自己決定」:『子どもと発育発達』第10巻第4号, pp.440-442, 2013.
- 4) 杉原隆・河邊貴子編著『幼児期における運動発達と運動遊びの指導－遊びのなかで子どもは育つ－』ミネルヴァ書房, 2014.
- 5) 体育科学センター調整力専門委員会体育カリキュラム作成小委員会「幼稚園における体育カリキュラム作成に関する研究 (I) -カリキュラムの基本的な考え方と予備調査の結果について」:『体育科学』第8号, pp.150-155, 1980.
- 6) 日本幼児体育学会編『幼児体育－理論と実践【初級】－』, 大学教育出版2013.
- 7) 文部科学省「幼児期運動指針」2012.
- 8) 文部科学省幼児期運動指針策定委員会『幼児期運動指針ガイドブック～毎日、楽しく体を動かすために』, 2012.
- 9) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館, 2008, 2013 (8刷) .